Kobe University Repository : Kernel

タイトル Title	自由学園北京生活学校の設立について(A study on the process of founding Peking Life School of Jiyu Gakuen)
著者 Author(s)	王, 娟
掲載誌・巻号・ページ Citation	鶴山論叢,10:1*-19*
刊行日 Issue date	2010-03
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	10.24546/81002079
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81002079

PDF issue: 2019-05-13

自由学園北京生活学校の設立について

A study on the process of founding Peking Life School of Jiyu Gakuen

王　　娟
Juan WANG

【要旨】

戦時下華北における教育と文化に関する研究は大変遅れている。日本の自由学園の創立者羽仁もと子（1873－1957）が1938年５月北京に創設した自由学園北京生活学校は、占領下の華北地方において民間の日本人が経営した最も重要な教育機関のひとつとみなされている。

しかし、従来の先行研究では、『婦人之友』や羽仁吉一・もと子の著述など日本側の資料に依拠することが多く、中国側の資料は殆ど使用されていない。しかも自由学園北京生活学校の教育活動に対する考察が主流であった。

そこで本稿では、新しく筆者が発見した中国北京市檔案館所蔵の史料を用い、また自由学園北京生活学校の卒業生らへの聞き取りも参考にしつつ、自由学園北京生活学校の設立過程を解明することを試みた。

その結果、自由学園北京生活学校の設立における特徴及び問題点は以下のように明らかになった。

まず、1932年の時点ですでに北京生活学校の構想は羽仁もと子の頭の中にあったが、実際に活動を始めたのは日中両国が全面戦争期に入ってからの1938年のことであった。そのため、結果的には日本政府の「大陸政策」に沿う形になってしまった。このような時代的制約は、戦時下日本人による在華教育事業・社会事業のすべてにおいて付きまとっていると指摘せざるを得ないことであろう。

次に、北京生活学校の設立は非常に短期間の内になされている。羽仁もと子らが北京生活学校を設立する計画を正式に発表したのは1938年４月であり、その直後に余晋龢の計らいで元警察訓練所に自由学園籌備処を設けている。北京生活学校の詳細は東京で協議され、同年５月12日に開学を決定した。しかし、軍部から不許可の通告を出されたため、最終的には５月15日に開学式が行われた。自由学園籌備処が発足して僅か一ヶ月余で北京生活学校は開学したのである。

さらに、北京生活学校は羽仁もと子の自由学園を中心に創立された。政府主導の事業で

はないが、日本政府から一種の宣撫工作として期待され、傀儡政権の臨時政府からも支援を受けていた事業である。言い換えれば、これらの支援がなければ、迅速な開校は不可能であった。

最後に、「自由」の名が「黙認」の形で認められたことによって、羽仁もと子は生活教育の理想を実現していると自負しながらも、その理想が国家主義的な理想に援用されていったことを認識するには至らなかった。

【キーワード】

生活即教育、羽仁もと子、自由学園北京生活学校

【Key word】

Life is Education, Hani Motoko, Peking Life School of *Jiyu* Gakuen

はじめに

本稿は主に自由学園刊行の『学園新聞』、雑誌『婦人之友』、及び筆者が発見した中国・北京市檔案館所蔵の史料を用い、自由学園北京生活学校（以下、北京生活学校、生活学校の語も使用）の設立過程を考察し、その背景を明らかにすることを目的としている。

自由学園北京生活学校は日本占領下の華北地方において日本の民間人が経営した最も重要な教育機関[1)]のひとつである。自由学園の創立者羽仁もと子によって1938年５月に創設された。「生活即教育」というモットーを「日支両国民が互いに親密なる感情と正しき認識に到達する」目的と結びつけ、華北地方の少女が集められた。学費食費すべてが無料という条件から、創設当時は合格定員20名に対して82人の志願者が集まった。それ以降人気が高まりつつ、第十期は25人の定員に対して400人の志願者も集まった。

当時、軍主導下にあった日本政府は、武力による中国侵略を強行する一方、中国の民衆に対する宣撫工作のための活動を宗教団体を含めた日本民間人にも求め、戦時協力体制を敷いた。こうした時代的な制約もあって、北京生活学校の設立が日本政府の「大陸政策」と関連していた点は否定できないように思われる。実際、北京生活学校は「隣保事業も国策の線に沿って」という旗印のもとに造られた「自由学園の大陸版」とする指摘がある[2)]。また、羽仁もと子の北京における活動を、キリスト教の立場から「戦争協力」だったとする批判も見られる[3)]。

こういう批判がある一方、北京生活学校の教育活動は「この時代における特異

な実践として位置づけられる」[4]或は「戦時下における唯一の文化事業」[5]または「稀な『正面教師』」[6]として評価する声もある。

このように北京生活学校に対する評価は様々であるが、その実態は殆ど解明されていない。

北京生活学校に関する先行研究は中国においては皆無である。日本においては太田孝子「自由学園北京生活学校の教育―日中戦時下の教育活動」（『岐阜大学留学生センター紀要』　創刊号　1999年３月）、内田知行「共生の思想―戦時下の自由学園北京生活学校」（『日本植民地研究』第11号1999年７月）、及び李紅衛「戦時下の日中教育文化交流に関する一考察――自由学園北京生活学校（1938－1945年）を中心として」（『アジア教育史研究』アジア教育史学会　2004年７月）がある。

太田の論考は北京生活学校の日本語教育の実践と羽仁もと子・吉一の思想を重点的に考察している。これは北京生活学校を研究対象として取り上げた先駆的な研究として評価できよう。太田は、羽仁もと子らが北京生活学校の置かれた「歴史的状況」を認識しえなかったところに最大の問題があると指摘し、生活学校の思想的限界を呈示した。しかし、太田自身も認めているように、中国側の資料を入手できていないという制約があって、北京生活学校の実態に関する考察には不十分なところがある。また参照した資料が限られているため、随所に誤りを含んでおり、生活学校に対する理解にも不十分な点がある。

内田は北京生活学校の教育活動を中心に考察をしている。内田は一方で、北京生活学校が天皇制的支配秩序のなかで行われた社会事業であり、当時日本の中国侵略を批判する明確な視点を打ち出すことはなかったと思想的な限界を指摘している。他方で、「共生」の模索を通じて軍国主義を乗り越えようとして、当時の日本国家のための国権主義、侵略主義からは最も遠い位置にあった存在として、北京生活学校を評価している。北京生活学校の指導者及び卒業生への聞き取り調査などに基づいた労作と言えるが、太田と同じく中国側の資料を使っておらず、北京生活学校を送り出した自由学園、特に戦時下の自由学園の実践に対する考察も欠けている。

李は北京生活学校と、李の主な研究対象である崇貞学園[7]とを比較し、「善意にもとづきながらも、国策に対応せざるを得なかった羽仁たちや清水の言動をどう評価していくかは今後の大きな課題であろう」と論を結び、「崇貞学園や北京生活学校の事例は、戦争と言う非常事態の中に置かれながらも国レベルでは実現し難い両国民の文化交流を可能にし」[8]たと、崇貞学園と北京生活学校とを比較

している。しかし、李の主な研究対象ではないため、論文としては短いもので、記述は生活学校の紹介に留まっている。

その他にも、羽仁五郎『自伝的戦後史』（講談社1976年）、現在のところ羽仁もと子の全生涯を本格的に取り上げた唯一の著作と言ってもよい斉藤道子『羽仁もと子―生涯と思想』（ドメス出版　1988年）、奥田暁子「キリスト者の戦争責任――羽仁もと子の思想と行動」（『女性と宗教の近代史』奥田暁子　編著　三一書房　1995年）は北京生活学校に言及しているが、いずれも北京生活学校の紹介に留まっている。

以上に概観してきたように、従来の先行研究は主に北京生活学校の教育活動を中心に考察を行った。しかし、これだけでは北京生活学校の全容を解明したことにはならない。そこで、本稿は北京生活学校の設立過程を解明することを試み、その特徴及び問題点を明らかにしたい。

1．自由学園北京生活学校設立の頃の時代状況

まず、北京生活学校設立の頃の時代状況を把握するために、華北の支配体制について確認する。

周知のように、1937年７月盧溝橋事件を契機とする日中全面戦争が勃発すると、日本軍は中国大陸の各地を占領した。1937年７月30日、支那駐屯軍は、天津と北京（当時は北平）を軍事的に占領し、それぞれに行政機関として地方維持会を成立させた。同年12月14日に北京に中華民国臨時政府を成立させた。この二日後、日本の対中国中央機関である興亜院が北京に新設置され、臨時政府の指導にあたったことはいうまでもない。1938年３月、南京に行政院長梁鴻志を首班とする傀儡の中華民国維新政府が成立したことにより、北京と南京のそれぞれに地方政府が存在するといった状況になった。1940年には両者が統合され、南京に傀儡の南京国民政府を成立された。それと同時に華北には華北政務委員会が設立され、華北の自治はこの華北政務委員会が担うこととなった。

このように華北の統治を担った行政機関は、治安維持会、臨時政府、華北政務委員会という変遷をたどってきた。臨時政府では、行政委員長の王克敏を初め、表向きは中国人が全ての役職に就任した。日本人がそれに加わることはなかったが、その内面指導には新設された北支那方面軍が当たっていたことから、臨時政府が傀儡政権であったことは明らかであった。

２．羽仁もと子と自由学園

北京生活学校の設立過程を考察する上で、羽仁もと子と自由学園について語ることは不可欠である。とはいえ、本稿は自由学園の教育思想そのものを考察対象としているわけではないので、ここでは概説的な記述に留める。まず羽仁もと子のプロフィールを見ておこう。

羽仁もと子（1873－1957）は明治末期から大正・昭和中期まで、教育・ジャーナリズム・婦人運動など様々な分野にわたって、活発な活動をしたことで知られている。また彼女は日本最初の女性新聞記者とも言われている。1890年、東京府立第一高女在学中に洗礼を受けた。翌年、第一高女を卒業し東京女高師を受けるが失敗し、巌本善治が校長をしていた明治女学校に入学した。明治女学校の在学中に帰郷（青森県八戸市）したもと子は、いくつかの学校で教師として勤めたり、結婚してから僅か半年で離婚するなど、何年間の不安定な時期を過ごした。1896年再び上京し、報知新聞社に入社した。1901年羽仁吉一（1880－1955）と再婚し、退社してから様々な活動を始めた。その活動の中には『家庭之友』（1903年）、『婦人之友』（1908年）、『子供之友』（1908年）の創刊、1921年、雑誌を通じて訴えてきた女性解放の主張に基づく女学校自由学園の創立、そして『婦人之友』の愛読者によって作られた「友の会」という婦人たちの組織運営、などがある。第二次世界大戦中は東北農村合理化運動を行ったり、自由学園北京生活学校を開設したりして、それらの活動にも全力を注いだ。

自由学園は羽仁もと子が1921年東京に造った文部省令によらない各種学校としての教育機関である。学校の名は、新約聖書の「汝等もし常に我が言に居らば真にわが弟子なり。また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を得さすべし」に由来する。もと子は当時日本の「殆ど型ばかりで実力のつかない、また我々の実際生活と没交渉な教育法」[10]に強く反対し、自ら考えることのできる「真の自由人」を育てることに学校の教育目標を設定した。学園開設に際して、もと子が発表した教育方針は、①生徒各自の実生活の経営を学ぶ、②生徒の興味と生活を出来るだけ社会と接触させる、の二点に要約できる。この方針に従って、学園ではユニークな「家族」制度を取り入れ、生徒を数名ずつの家族形態にわけ、昼食を含むすべての日常生活を雇い人無しに、生徒自身が責任を持って行う自労自治の生活を奨励した。

このもと子の理念が初めて社会の中で試されたのが1923年９月１日に起こった関東大震災の時であった。学生の本分を守るという名目のもとに何も支援活動を

しない学校、また、縫い物だけをさせた学校などがある中で、自由学園は被害を受けなかったため、生徒たちは全校をあげて救援活動に当たった。衣類と布団作り、ミルクその他の救援物資の配給、太平小学校への給食活動など様々な救援活動に携わる。

このように、もと子がいう「社会に接触する」[11]教育方針は生徒たちが実際に社会のメンバーとして活動する形で現れた。もと子自身も「子供を社会に接触させるのが、正直に生きる人間を本当に作ってゆく、最も間違いのない着実な仕方」であると自分の教育方針に確信と自信を深めていった。それ以後、この教育理念に基づき、自由学園卒業生は社会活動への参加を続けていった。

1928年４月の卒業生26人のうち17人は消費組合の設立と経営を始めた。29年卒業生の「大部分」は、学校に近い農村にセツルメントを作った。30年卒業生は「ほとんど一致して」工芸美術を研究しつつ制作する団体（のち工芸研究所）を設立した。31年卒業生の40余人は「家庭生活合理化展覧会」を東京・横浜・大阪・京都・名古屋などで開催した。32年卒業生の一部は英文を書く学習と結びつけて発行された学園内の週刊新聞を拡張して年四回の英文雑誌を作った[12]。35年には大凶作に見舞われた年には東北６県にセツルメントを開設した。５年余にわたって貧しい家庭の主婦を対象に裁縫などの技術の指導を中心に生活を工夫させていくための生活合理化運動を展開した。この活動には女子部高等部学生たちが参加している。

ここで注目すべきことは東北セツルメント運動の経験である。38年６月に、羽仁吉一は東北農村セツルメント運動の成果に言及した上で、次のように述べた。「今度北京にはじめる生活学校も、民族が違い歴史が違い風俗習慣が違い、従ってその教育の方法は違っても、根本の精神においては全然同一である。民族や歴史や習慣を超えて、その奥にある人間性そのものを、最も手近な生活の事実から揺り動かしてゆくやり方だ」[13]、「生活学校の教育は、自由学園教育の延長だ。東北セツルメントも同様であり、同一教育精神の幹に咲いた花である」[14]。

このように、自由学園の卒業生が学園の教育理念に基づき、社会活動の経験があったから、38年４月に卒業した第16回生を中心とした卒業生の北京生活学校への参加が実現したのである。北京生活学校を設立するため北京に派遣された先発隊は「もし東北セツルメントでの厳しい実践経験がなかったら、反対を押し切ってまで開校を断行するほど強くはなりえなかっただろう」[15]と書いている。

３．「生活即教育」を中国へ

前述した自由学園の「生活即教育」の理念に共鳴をしたのだろうか、当時在日中華キリスト教青年会（YMCA）総幹事であった馬伯援[16]は長女の馬必寧（1927－1932年在籍）を自由学園に入学させている。また中国四川省より来日中の視察団にも自由学園の見学を勧めた。日本において帝国大学を初め国公立学校の官僚的な冷遇に不満をもっていた一行は、自由学園の家族的な接待に感激し、帰国後の報告書は同学園を高く評価している。これをきっかけに、以後日本に来る視察団は自由学園を訪れるようになったという[17]。こうして「中国のいろいろの地方から来る教育者に接する機会が多かった。そんなことから、だんだん隣邦の文化―特に教育に興味をもつように」[18]なり、中国との「教育交流に大きな意味を認めていられた」[19]。1931年に入って、もと子が卒業前の学生を引率して中国各地の大学を歴訪する計画も立てられていた。しかし、これは満州事変の勃発により実現しなかった。

満州事変勃発時、もと子が『婦人之友』の巻頭文で絶対平和の立場を訴えていた。1931年12月には「本当に神を信じるものは戦いを否定します。武器を持って御自分を捕まえた兵卒どもに剣を持って立ち向かってゆくペテロをお叱りになったのはキリストです。私たちの立場は武器を持ってする正当防衛すら明らかに否定するものです。」[21]という。このように、当時彼女は戦争反対こそがキリスト信仰にふさわしいものだと信じていた。

しかし、1932年５月外遊する前に、中国からの留学生たちと事変について語り合ったときのもと子の態度に微妙な変化が見られる[23]。当時、留学生たちが事変の原因は「21か条」と主張したのに対し、もと子は中国の反日運動が事変の原因であるとしていた。この点の認識はついに終戦に至るまで変わらなかったと指摘されている。

満州事変後の1932年５月、もと子はニースの世界新教育会議[24]に出席し、「それ自身一つの社会として生き成長しそうして働きかけつつある学校」として自由学園を紹介した。その前の２月15日自由学園『学園新聞』では「或日のお客様のお話　ニースの世界教育会議のアメリカ代表」という記事が載っている。自由学園と同じく生活教育の学校であるリンカンスクールに勤務しているアメリカ代表のラッグ氏は、自由学園のような「自由と責任を通して強い人間を作る」「よい教育によって国際的親善ができ、だんだんに国と国が親しく出来る」と自由学園を評価した。これに対してもと子は「今、支那と日本の争について、毎日自分の

思っていることは、日本とアメリカと一緒になって、支那にこの志の学校を作ることです。その外に支那と日本の問題を解決する道はないと思います」[25]と述べた。

ここでもと子が初めて中国で自由学園のような学校を作りたいと明言したのである。もと子は「教育によってでなければ根本的に世界を変えてゆくことは出来ない」と信じていた。それがためであろうか、もと子は、中国と日本の問題を解決するために中国に生活教育の理念を広めようとしていた[26]。

それ以降馬伯援との交流はあったが、中国で学校を作るには到らなかった。

1934年３月、満州事変で故郷の湖北省棗陽県鹿頭鎮に帰った馬伯援が日本へ再訪したとき、吉一との間で留学生の交換が話題になった。同年６月10日、自由学園教師の山室周平・善子兄妹二人が「家庭友情使節」として武昌に派遣され、中国に四ヶ月滞在した。馬伯援の主宰する農村合作社とその学校（求実小学校）、武漢の女子職業学校等を訪れ、北京、上海など大都市では有数の大学を視察した。また、上海では、魯迅の親友として有名な内山完造宅に泊り、魯迅の思想にも触れることができたという[27]。

４．自由学園北京生活学校の設立構想

既に述べたように、もと子は1932年の時点で、武力ではなく、教育、特に、「生活即教育」という独自の教育思想を中国に広めることによって、中国と日本の親善が出来ると考えていたようである。それ以降、中国で「自由学園のような学校」をつくるには到らなかったが、その思いは強かったようである。吉一は馬の娘に帰国したら学校をつくれと勧めていた[28]。

しかし、生活教育の理想は国境を越えないまま時代はめぐり変わった。

1937年日中全面戦争開始後、わずか半年で南京が陥落したとき、多くの日本人は事変が日本の勝利に終わることは確実だと信じ、これから本格的な大陸経営が始まると見ていた。とくに、華北は日本が握ると見て、文化工作を始めよという意見は強かった。

こうした状況の中で、「これまでの日本は、世界舞台に何を持って働きかけたか。まず戦争でした。次には商売でした」[29]と言う反省を口にしていたもと子も時代の要請に応じたのである。

1937年12月30日、羽仁夫妻は婦人之友社において、安部磯雄、久布白落実、河野密、小泉丹、東畑精一、長谷川如是閑、松岡正男などを招いて、「支那の民衆

のためにわれら何をなすべきか」という座談会を開き、中国での活動のあり方を探った。座談会の中では、清水安三の事例がしばしば取り上げられ、もと子は中国において「よい働き」[30]をした日本人だと清水を高く評価している。

座談会で確認したことを受け、翌年の１月13日に、もと子は卒業目前の自由学園女子部高等科三年生全員に対して、日本も中国も「ただキリスト教による真の愛によって占領されるところとならなければならない。そのために我々にできることはなにか」[31]と問いかけ、中国への働きかけを卒業勉強にしようと提言した。早速卒業生たちは、同級生の中国人留学生に中国語を習い始めたり、羽仁たちの紹介を通じて様々な分野で中国に関係のある人々を訪ねて意見を伺ったりした。これが北京生活学校のアイディアの最初の提示[32]となったといわれている。

しかし、既に述べたように、32年の時点で羽仁もと子の頭の中には中国で学校をつくる発想があったのである。では、38年に出された北京生活学校設立の構想は、果たして単なる時代の要請に応じただけだったのであろうか。

座談会で、国民政府の新生活運動に前々から不信感を表明していた羽仁吉一は、中国に真の生活教育を導入することを望むが、蒋介石らがそれを果たし得ないなら、日本が代わってその無能を補うのみと、「蒋介石一派のやっていた所謂『新生活運動』を、全然新しく日本の手によって」[33]やると述べた。中国に生活教育を広めようという宿志は日本の侵略の結果としてその実現の可能性が開けたのである。

一方、羽仁もと子は、北京のいたるところに、「立派な文字」が書かれてあるが、この立派な字を読みうる中国人は少ない、町に「立派な美術品、工芸品」があるが、「ほこりにまみれている」、「支那人の文化、生活は行き詰って」[34]いると見ている。

張明杰によれば、多くの明治時期の漢学者は、実際に中国に行ったことがなく、頭の中には儒教によって培われた幻の「中国」しかない。一旦中国の土に踏んで、現実の中国を見たとき、以前から「聖人の国」と思い込んでいた中国に失望を感じ、強烈な衝撃を受ける。彼らの中の「文化中国」と目の前の「現実中国」の間にはあまりにも差があり、その差が彼らの分裂した中国観として反映される[35]。

毛利藩の士族の家に生まれ17歳で新聞記者になるまで、国許の漢学塾に学び、四書に精通し、儒学的な素養がある羽仁吉一と八戸の小学校を終えてから東京へ遊学、府立第一高等女学校及び明治女学校に学んだ羽仁もと子にもそのような分裂した中国観が見られる。

初めて北京に行った羽仁もと子は、「行き詰った」中国の文化、生活をみて涙

が「とめどもなく流れてくる」ほどであった。この行き詰った中国の文化、生活を打破する力を生活教育に求めるが、それを実現させるために、「今度の戦争」[36]、即ち日本の侵略の力を借りていくことになっていく。

羽仁もと子には中国や朝鮮の抗日運動は、「不幸な歴史」からの「愚痴な執着」に過ぎず、日本人が「特種の幸いな愛国心」を持っているのに対し、中国人は「愚痴な悲しい愛国心」しか持っていないと見ていた[37]。彼女にとって、中国は不潔で乱雑な環境の中で子供が育ったらよくない結果をもたらす典型的な実例[38]であった。のみならず、赤化していく恐れのある危険な国[39]でもあった。昔から日本にいろいろ迷惑をかけてきたのみならず、この度は、世界各国から、日本が好戦的な侵略国と誤解されるように仕向けており、日本に膨大な被害を与えている国であった。即ち、中国の国民政府が抗日を掲げ、それをもって中国の統一を計ったために、日本が世界から好戦的な侵略国として誤解されてしまったという論理であった[40]。

このような中国観を抱えたもと子は1938年４月、『婦人之友』創業35周年記念事業として北京生活学校を作ることを正式に発表した。

以上に述べたように、自由学園北京生活学校の原案は４月の時点にすでに打ち出されていたことがわかる。しかし、最初の計画書は現在までのところ確認できていないため、ここでは1938年５月に北京で発表された「自由学園北京生活学校簡章」と『婦人之友』の関連記事を見ていくことにする。

自由学園北京生活学校簡章

北京生活学校乃東京之自由学園所設立者、其旨意如下

自由学園北京生活学校為日華両国人民融恰之機構、以下三項為目標、最後以期両国人民互相達到真正之認識及親密之感情。

1　共同学習両国語言――欲彼此互相深刻了解及発生感情。則必以言語伝達双方之意思及維持其感情、故教授言語為一要項。

2　共同学習生活――生活学校之目的、欲人々達到合理化之生活、講求衛生、一方面実践以上之事項、一方面進而完成有条理及整潔之生活方式。

3　共同学習技術――女性之技術（主要者、為美術工芸之類）、不特能為自身之産業、更漸次促其発展、進而為本地産業之一、以利福人民。

創立者

羽仁もと子　東京自由学園長・「婦人之友」主筆・友之会中央委員長

指導者
　安部道雄（自由学園教授・理学士）
　山室光子（自由学園美術科教師・自由学園工藝研究所員）
　今井和子（自由学園美術科教師・自由学園工藝研究所員）
　角館綾子（自由学園工藝研究所員）
　川戸俟子（自由学園英文系卒業）
　林幹子（自由学園経済系卒業）
　遅伯昌（自由学園経済系卒業）
招生簡章
　人数――20人
　性別――女
　年齢――15至18歳
　資格――以小学校畢業者
　期限――三個月畢業
　学費――学費以及寝食費一概不収（凡入学者皆必須住於校内宿舎）
　開学日期――民国27年5月中旬
　報名地点――自由学園籌備処　北京市旧鼓楼大街、小石橋二号内
　　自由学園籌備処（警察訓練所旧跡）
　　電話（東局2074）

出所：北京市檔案館所蔵 J183-002-28576「自由学園北京生活学校簡章」『北京市警察局内五区関于支部人士設立自由学園北京生活学校、北京憲兵第三大隊、分中隊成立的呈報』（10－11／23）。

この簡章は1939年 2 月に一部修正された。その意味は以下のようなものになる。

北京生活学校は、東京の自由学園によって設立されます。北京生活学校は、日華両国民融合の機関として、次の三つの目標の下に、両国民が互いに親密なる感情と正しき認識に到達することを期します。一、共に両国の言葉を学ぶ――相互に深く了解し、親しみを増すためには、言葉を以って意思感情を伝達することが必要です。言葉の教育を三要項の一つとする理由であります。二、共に生活を学ぶ――生活学校は、人々が、衛生的な且つ合理化された生活に到達することを望むものであります。即ち日々この目的に向かって実践しつつ、進んで条理に適う清潔なる生活方式の発見とその完

成に努力する。三、共に技術を学ぶ――女性にふさわしい技術（主として美術工芸）の教育をします。それは自身の産業となし得るのみならず、更に漸次その発展を促し、進んでは土地の産業の一つとして、人々の利幅となるようにしたいと思います。

これによれば、自由学園北京生活学校の開校目的は「日華両国民融合の機関として」、「両国民が互いに親密なる感情と正しき認識に到達せんこと」である。設立趣旨は「共に言葉を学ぶ、共に生活を学ぶ、共に技術を学ぶ」を掲げている。15歳から18歳の女子20人を対象とし、資格は小学校卒業者である。学費・食費は一切無料、ただし寄宿舎に住むこと。修業期限は三ヶ月である。

また、『婦人之友』1938年６月号には「北支事業一ヶ月間の進展略報」という記事から自由学園北京生活学校では「時間割なしの生活」と「先生なし」の方針をとっていたことがわかる。つまるところ、自由学園北京生活学校は一軒の家庭のような雰囲気の中に、時間割なし、先生なしで、お互いに言葉を学んで、共に工芸を学ぶ学校、というものであった。北京生活学校は東北セツルメントと同様に、自由学園の教育理念を踏襲している。

ここで一つ注目すべきことは、羽仁たちの原案には日本人女子も募集しようとしたことである。そのことは北京市檔案館所蔵の以下の資料から窺える。

「本校招考華人女生20名、今日考試、並是日挙行開学上課。惟日本女生人数尚未定妥等語」「拠巡官李保昇称、査該校本月７考試、華人女生12日開学、拠教師日本女士今井和子声称本学園現已籌備妥協、計本月７日到校報考華人女生60余名、按照規定考取20名、日人女生尚無定数、皆不入考。民国27年５月８日」[41]（下線は筆者、以下同）

この資料の意味は「本学校は中国人女子20名を募集する。今日試験を設け、開学させる。ただ、日本人女子の人数はまだ定まらない」「巡査の李保昇によれば、該学校は本月７日に試験を設け、中国人女子60名が応募した。規定に従い20名を取った。日本人女子の人数はまだ定まらないため、試験を設けない。1938年５月８日」

ここから当時、羽仁たちは自由学園北京生活学校では中国人女子と別に日本人女子も募集しようとしていたことがわかる[42]。

５．先発隊のメンバーと活動

羽仁たちは第一先発隊に自由学園北京生活学校の原案を持たせ、1938年３月13

日北京に派遣した。先発隊は４月９日まで北京に滞在していた。そのメンバーは「安部道雄・山室善子・川戸俟子・林幹子・遅伯昌」の５人から構成されている[43]。

安部道雄は自由学園の教授であり、先発隊のうち唯一の男性でもある。山室善子は救世軍山室軍平の娘で、婦人之友記者、友の会中央委員を務めていた。川戸俟子[44]・林幹子・遅伯昌[45]は自由学園高等科の新卒業生である。

第一先発隊の主な仕事は学校校舎探しであった。当時、北京に進出した日本人が多かったため、特務部を通しても適当な建物は見つからなかった。安部一行は木下利雄[46]の紹介で北京市長兼警察局長の余晋龢[47]と会うことができた。余から北京市旧鼓楼大街小石橋胡同内にあった二千坪の広さのある警察訓練所として利用していた部屋を無償提供されたのである[48]。安部たちは早速警察訓練所の表札を外し「自由学園籌備処（準備事務所の意味）」を設けた。

なぜ余晋龢は生活学校の設立に積極的に協力したのだろうか。当時、日本軍による華北地域制圧とその結果として傀儡政府の要職についた親日派の余晋龢には、日本との友好をより強め、日本の主導に委ねながらも一定の社会秩序を確立することを目指したであろう。

４月９日、第一先発隊は一旦帰国し、羽仁たちに北京の事情を詳しく報告した。その報告に基づいて、羽仁たちの北京生活学校教育案も修正された。

38年４月22日、開校準備のため、第二先発隊が北京に派遣された。今回は自由学園美術科教工芸研究員である山室光子と今井和子、友の会中央委員の安盛弘子が派遣された。山室と今井は自由学園卒業後チェコスロバキアの美術学校に１年間、そのあと半年間ドイツ・ベルリンの美術学校に留学したという経験を持っており、37年のパリ万国博覧会に自由学園工芸研究所から出品された十数点の作品の製作リーダーであった。作品中の絨毯がフランス政府の金賞を受賞したことが示すように、二人はその時代の日本では傑出した工芸才能を持った女性であった。羽仁もと子が生活学校の主な技術を工芸」と決めたため、工芸才能を持つこの二人を最初の指導者として選んだのであろう。

４月28日に北京に入った３人は早速開校準備を始めた。主な仕事は生徒募集であった。５月１日、新卒業者の川戸俟子、林幹子と工芸研究所の角館綾子が第三先発隊として北京に出発した。５月10日、もと子も娘の恵子と一緒に北京に到着した。

第二、第三先発隊はもと子と一緒に第一期生入試を担当した。入学試験は生活学校の開校前に行われ、中国語の筆記試験と個人面接の二段階に分けられた。試

験官は羽仁もと子を初め、自由学園の教員と新卒者だった。第１期の筆記試験では、82人の応募者に対し「あなたは朝起きてから夜寝るまで一日中何をして暮らしていますか」と「あなたはどうして、自由学園北京生活学校に入りたいと思いますか」との課題[49]だった。面接で21[50]人に入学を許可した。

６．開校式

自由学園北京生活学校は５月12日に開校式を開こうとした。しかし開校する前に「自由の名など論外である」[51]と軍部から断じられ、開校は許可されなかった。自由主義敵視の戦時下にあって、「自由」の名が敵視されたのは当然であろう。1943年、自由学園は文部省から自発的改名を求められた。「羽仁学園」或は「南沢学園」はどうかという示唆もあった。しかし、もと子は「自由」の２文字は学園教育の本体そのものであるからそれを取り去ることは学園そのものを否定することになるからとして、国家が禁止するのならその意志に従うほかないが、自発的には変えられないと答えた[52]。「自由」を守るため、もと子は文部省に出かけて毎日のように激論を交わしたという。結局自由学園は最後まで自由の名を冠したままで、従来の事業を継続し得たのである。

さて、自由学園北京生活学校の「自由」はどのようにして可能であっただろう。関係者の記述によれば、もと子は「自由の名など論外である」と断言する軍人に対し「一歩も退かず、粘り強く情理を尽くして訴え、軍司令部・軍特務機関に日参し、結局軍は黙認という対応をとった」[53]或は「学校を創める時は自由学園の自由という名のために種々の干渉を受けましたが、ミセス羽仁は自由のないところに真の教育はありえないと主張して、ついに黙認ということで開校したのでした」[54]云々とある。

当時、もと子と軍部との交渉に関する資料は無いため、詳細は確認できない。しかし、開校式に祝電を寄せた人々の中に、貴族院議員の平生釟三郎（北支派遣軍最高顧問）、湯沢三千男（北支臨時政府行政顧問）の名前[55]があったことから推測できるように、有力な支持者があったのだろう。

この件については、北京市檔案館で新しく見つけた自由学園北京生活学校の開学許可に関する資料が新しい手がかりになると思われる。

「拠巡官李保昇称、査該校本月７日考試、華人女生12日開学、拠教師日本女士今井和子声称本学園現已籌備妥協、由校長羽仁先生創立自由学園北京生活学校業経呈報日本警察署許可、並由日警察署転知北京社会局、唯執批尚未発到、計本月

７日到校報考華人女生60余名、按照規定考取20名、日人女生尚無定数、皆不入考。民国27年５月８日」[56]「呈報事窃管界小石橋二号経日本羽仁先生設立自由学園北京生活学校業已呈報在案該校原称本月12日開学、因手続未能弁理完竣至今日始行開学。民国27年５月15日」[57]

下線部には、「校長の羽仁（もと子）先生は自由学園北京生活学校を創立する事を、日本警察署に許可を申請し、また日本警察署を通じて北京社会局に伝えたが、許可はまだ下りていない」、「もともと５月12日に開学式を行う予定だったが、それまでに手続きが完成していなかったため、今日（５月15日）開校式を挙げることとなった」と書かれている。

ここから二つの事柄を読み取れる。一つは羽仁たちが日本警察署に開学許可を申請したことである。もう一つは羽仁たちが警察署を通して北京社会局[58]に登録しようとしたことである。しかし、なぜ日本警察署に開校許可を求めたのかを確かめる資料がないため、今後の資料発掘を待ちたい。また、北京社会局に登録認可を申請したが、それ以降、認可した資料は見当たらないし、卒業生らの証言[59]から、正式には登録していないことがわかる。言い換えれば、もし北京社会局の正式認可を受けていたとすれば、『婦人之友』や『学園新聞』には大いに報道されただろう。

1938年５月15日午後２時に、厳重な警備[60]の下に、北京生活学校の開校式は北京市旧鼓楼大街小石橋二号の北京生活学校において行われた[61]。羽仁もと子をはじめとする生活学校の指導者たちと新入生の家族以外、来賓として北京特別市市長兼任警察局長の余晋龢、日本側から外務省の原田龍一書記官、陸軍特務部河野少佐、崇貞学園の清水安三、田川大吉郎が出席した。まず羽仁もと子が「この学校の教科書」は「これから始まる生活といふ教科書」と述べ、生活学校のシステムを紹介した。続いて余晋龢、原田書記官が祝辞を述べた。それから清水安三と田川大吉郎も相次いで講演をした。最後に羽仁もと子が六人の指導者を紹介し、式を締めくくった。

終わりに

本稿は、自由学園北京生活学校の設立経緯について考察した。これを通じて、自由学園北京生活学校の設立における幾つかの特徴及び問題点を見出すことができる。

まず、1932年の時点ですでに北京生活学校の構想は羽仁もと子の頭の中にあったが、実際に活動を始めたのは日中両国が全面戦争期に入ってからの1938年のこ

とであった。そのため、結果的には日本政府の「大陸政策」に沿う形になってしまった。このような時代的制約は、戦時下日本人による在華教育事業・社会事業のすべてにおいて付きまとっていると指摘せざるを得ないことであろう。

次に、北京生活学校の設立は非常に短期間の内になされている。羽仁もと子らが北京生活学校を設立する計画を正式に発表したのは1938年４月であり、その直後に余晋龢の計らいで元警察訓練所に自由学園籌備処を設けている。北京生活学校の詳細は東京で協議され、同年５月12日に開学を決定した。しかし、軍部から不許可の通告を出されたため、最終的には５月15日に開学式が行われた。自由学園籌備処が発足して僅か一ヶ月余で北京生活学校は開学したのである。

さらに、北京生活学校は羽仁もと子の自由学園を中心に創立された。政府主導の事業ではないが、日本政府から一種の宣撫工作として期待され、傀儡政権の臨時政府からも支援を受けていた事業である。言い換えれば、これらの支援がなければ、迅速な開校は不可能であった。

最後に、「自由」の名が「黙認」の形で認められたことによって、羽仁もと子は生活教育の理想を実現していると自負しながらも、その理想が国家主義的な理想に援用されていったことを認識するには至らなかった。

注

1）坂本義男（「北京の学校と学生」昭和14年６月。阿部洋編『中国近現代教育文献資料集第７巻日本占領下の中国教育』日本図書センター、2005年、p. 25）によれば、当時最も有名なのは崇貞学園と北京生活学校であるという。

2）吉見周子「羽仁もと子」（円地文子監修『人物日本の女性史12　教育・文学への黎明』集英社、1978年）p. 216。

3）奥田暁子「キリスト者の戦争責任――羽仁もと子の思想と行動」『女性と宗教の近代史』奥田暁子編著、三一書房、1995年。

4）太田孝子「自由学園北京生活学校の教育―日中戦時下の教育活動」『岐阜大学留学生センター紀要』創刊号、1999年３月、p. 3。

5）斉藤道子『羽仁もと子―生涯と思想』ドメス出版、1988年、p. 290。

6）内田知行「共生の思想―戦時下の自由学園北京生活学校」『日本植民地研究』第11号、1999年７月、p. 17。

7）崇貞学園（1921－1945）は桜美林大学の創立者である清水安三（1891－1988）と妻の郁子（旧姓小泉1892－1964）が戦前北京で開かれた中国人女子のための教育機関である。2005年３月30日、崇貞学園の後身である陳経綸中学校のキャンパスに清水安三の銅像及び彼が好んだ「学而事人（学んで人に仕える）」の記念碑が建てられた。（『中国教育報』2005年４月５日第二版）2007年３月上海人民出版社が刊行した中国語版山崎

朋子著『朝陽門外の虹：崇貞女学校の人々』は大きな反響を呼んでいる。

８）李紅衛『清水安三と北京崇貞学園―近代における日中教育文化交流史の一断面』不二出版、2009年２月、p. 230。

９）李紅衛「戦時下の日中教育文化交流に関する一考察――自由学園北京生活学校（1938－1945年）を中心として」『アジア教育史研究』アジア教育史学会、2004年７月、p. 84。

10）羽仁恵子『自由学園の教育』自由学園出版局、1967年、p. 17。

11）同上。

12）羽仁もと子『著作集　第18巻　教育30年』婦人之友社、1950年、pp. 36-40。

13）羽仁吉一『雑司ケ谷短信　上（1938年６月）』、婦人之友社、1956年、p. 138。

14）同上、p. 151。

15）「北支第一先発隊報告」『婦人之友』1938年５月号、p. 52。

16）1884－1939年、湖北省棗陽出身。1905年日本に留学、東京神田区日本語高等学堂で一年間勉強し、早稲田大学に入学、同盟会に入会。1909年帰国。南京臨時政府成立後、孫文の秘書、臨時政府内務部総務司司長を務め、1913年２月孫文と黄興とともに渡日、同年４月渡米留学。1914年帰国後郷村教育を推進。1919年再び渡日、中華留日基督教学生青年会早稲田分会幹事を務め、1923年本会の総幹事になる。彼がどのような経緯で羽仁夫婦に接近し、またどういうふうに自由学園と中国の交流にかかわっていたのかは、自由学園の活動の意味を検討するうえで大切であるが、今の段階ではそれに関する資料が不足しているので、今後資料の発掘を待ちたい。ただ、現存する資料から馬氏と羽仁たちの接点は吉野作造にある可能性が高いと思われる。吉野作造は1920年21年度の『婦人之友』に毎号、時事解説を書いていた。馬氏は1934年吉野作造の遺族に有志よりの募金を贈るため日本を訪れている。

17）羽仁吉一『雑司ケ谷の短信　下（1953年７月）』婦人之友社、1956年、p. 187。

18）同上。

19）山室光子前掲『婦人之友』1991年10月号、p. 74

20）自由学園『学園新聞』第13号、1932年２月１日。

21）「『めでたし、恵まれるものよ』」『著作集16　みどりごの心』pp. 357-358。

22）もと子の論調が変わり始めたのは、当時の他の婦人運動家たちと同様に、日中戦争が勃発した1937年頃からだと言われている。「座談会―歴史の光と影―『婦人之友』と戦争」『婦人之友』2003年８月号、p. 69。

23）「中華民国の学生と時局について語る」『婦人之友』1932年５月号、p. 60。

24）主宰は新教育協会。この協会はイギリスを中心に世界各国に支部を有し、日本の新教育団体もこれに加盟している。この年の会議は第６回世界会議で、「教育と変化しつつある社会」が主題である。

25）前掲『学園新聞』第13号、1932年２月15日。

26）「中華民国の学生と時局について語る」『婦人之友』1932年５月号、pp. 55-61を参照。

27）山室光子前掲『婦人之友』1991年10月号、p. 74。

28)「中華民国の学生と時局について語る」『婦人之友』1932年５月号、p. 59。
29)『婦人之友』1938年４月号。
30)「支那の民衆のためにわれら何をなすべきか」『婦人之友』1938年２月、p. 46。
31）自由学園女子卒業生会前掲書 p. 92。
32）川戸俟子が「最終学期の１月13日、高等科三年生みな…卒業勉強の主題が決まってしまったのでした。…こうして北京生活学校の構想が羽仁両先生と私達の間で描かれ始めました。」云々と述べている。自由学園女子部卒業生会編『自由学園Ⅱ女子部の記録（1934－1958）婦人之友社、1991年、pp. 92-93。
33)「支那の民衆のために我ら何をなすべきか」『婦人之友』1938年２月号、p. 45。
34)「女性の真心を交換　開校した『北京生活学校』」『東京朝日新聞』朝刊1938年６月13日。
35）張明杰「明治漢学家的中国遊記」『読書』2009年第８期、p. 58。
36)「女性の真心を交換　開校した『北京生活学校』」『東京朝日新聞』朝刊1938年６月13日。
37）羽仁もと子『著作集　第３巻　思想しつつ生活しつつ』pp. 270-274。
38)「家族日本を作りましょう―東北の更生をたすけて」『婦人之友』、1935年２月号、p. 31。
39 「家族日本の真面目」『婦人之友』、1937年10月号、p. 35。
40)「この恩寵に眼を開け」『婦人之友』、1938年１月号、pp. 36-37。
41）北京市檔案館所蔵 J183-002-28576「自由学園北京生活学校簡章」『北京市警察局内五区関于支部人士設立自由学園北京生活学校、北京北京憲兵第三大隊、分中隊成立的呈報』（14－15／23）
42)『婦人之友』や『学園新聞』、関係者の記述からにもそのような記述は見当たらないため、結局中国人だけを募集した理由は今後の資料の発掘を待ちたい。
43)『婦人之友』1938年４月号、p. 39。
44）もと子の信仰の指導者牧師植村正久の孫であり、自由学園の教師でもあった植村環の娘。
45）遅伯昌（1917-　）ハルピンの実業家遅敵夫の長女。ハルピン女子高等学校卒業後、イングリッシュセカンダリースクール、セントラルフランセススクールを経て、1935年尾崎行雄の紹介で日本の自由学園に留学し、卒業。その後、中国に帰り、1938年自由学園北京生活学校の創立に尽力。1948年再来日してから、自宅でのほか、元宮家、欧米各国大公使館のグループに中国料理を指導。1965年東京都港区に華都飯店（シャトーはんてん）をオープンした。
46）天津友の会前会長の夫、経歴不詳。
47）余晋龢：1887-？　浙江紹興出身。1911年日本陸軍士官学校を卒業後、国民政府時期に憲兵学校の教官に就任。その後青島市港政局局長、青島市公安局長、北京市公安局長、厦門市長を歴任し、1936年から国民党外交部特派員に就任した。盧溝橋事変後、北京市長、北京市警察局長、華北政務委員会常務委員、建設総署督弁などの要職に就いたほかに、東亜文化評議会評議員、北京特別市市立国術館長を兼務した。北京市長を務めていたとき、北京市内の食糧の自給自足を実現するために、市内で畑を開き、天壇

の空地で麦を植えるべきだと日本軍に提案した。戦後、戦犯として収監され獄死した。

48）林幹子「北京市長余晋龢氏とその家族」『婦人之友』1938年５月。

49）「支那の少女はかう答へた（十八篇）」『婦人之友』1938年８月 p. 88一期生の宋聚石が試験を受けなかったという。（2009年７月30日北京にて宋聚石への聞き取り）

50）これまでの先行研究では合格者を20人としている。しかし、38年５月15日午前10時10分発の電報には「カイコウシキゴゴ３ジ　ヨイセイト21ニントッタ」と記されている。また『婦人之友』1938年７月号「北京生活学校日報抄」から生徒の名前を確認していくと、21名の生徒がいたことが分かった。しかし、それ以降の記述は殆ど「20人」になっている。恐らく21人が合格していたが、20人しか入学しなかったのであろう。

51）山室光子「半世紀の夢あらたに」『婦人之友』1991年９月、p. 79。

52）羽仁吉一前掲書　下巻「自由の文字」（1953年10月）、p. 203。

53）山室光子「半世紀の夢あらたに」『婦人之友』1991年９月、p. 79。

54）1947年３月来日した作家・謝冰心と羽仁吉一・もと子夫婦との座談会「世界に平和と美を求めて」、『婦人之友』1947年５・６月合併号、p. 6。

55）『婦人之友』1938年６月号、p. 39。

56）北京市檔案館所蔵 J183-002-28576「北京市警察局内五区関于支部人士設立自由学園北京生活学校、北京憲兵第三大隊、分中隊成立的呈報」（14／23）

57）北京市檔案館所蔵 J183-002-28576「北京市警察局内五区関于支部人士設立自由学園北京生活学校、北京憲兵第三大隊、分中隊成立的呈報」（５／23）

58）1928年７月27日、北平特別市政府によって設けられた。主に北平市戸籍調査、人事登録、育児、老人福祉、救済、風俗の改良、文化教育事業の管理など社会行政事項を担当する。1932年７月、北平市政府は北平教育局を撤退し、教育局の事項を社会局に移行した。1937年盧溝橋事件以降、日本は北平を占領し、北平市社会局を北京特別市社会局に改称させた。1938年６月、臨時政府の命令で北京特別市教育局が設立されるまで社会局第三科が北平の教育行政事務を担当していた。北京市檔案館ホームページ http://www.bjma.gov.cn/staticfile/Exhibition/yin/1-5.html。

59）2009年８月20日北京にて梁美琳氏、黄恵芬氏、劉亜君氏、韓君潔氏への聞き取り。

60）北京市檔案館所蔵「北平市警察局内五区関于支部人士設立自由学園北京生活学校、北京憲兵第三大隊、分中隊成立的呈報」J183-002-28576によれば、「巡官」「長警」が現場で警備をしていた。

61）羽仁恵子「北京生活学校開学式の記」『婦人之友』1938年７月号。

（オウ　ケン　国際文化学研究科アジア太平洋文化論コース）